令　和　３　年　度
宮崎国際大学　国際教養学部
一般推薦Ⅱ期

試　験　問　題
【小　論　文】

受　験　番　号
氏　名

小論文　国際教養学部

問題

次の文章は、新聞に掲載された「『美白』は差別か」をテーマとする論考の中の１編です。「美白」問題を通して、日本人の「肌の色」に関する屈折した思いが歴史的に考察されています。また、それは現代では「女性の立ち位置」の問題でもある、と指摘しています。筆者の指摘・考察を要約するとともに、それを踏まえて、「美白」問題に対するあなたの考えを６００字以内で述べてください。

「美白」は差別か　　―近代日本の矛盾を可視化―

明治大学専任講師　　眞嶋　亜有

化粧品会社から「ホワイトニング」などの表記を削除する動きが出てきました。日本人の人種意識や差別を考え直すという点で、いい機会だと思います。

日本人女性が求める「美白」は、みずみずしく、きめ細かく、透明感のある肌を意味します。白人の特権性を直接的に示してはいません。

だからといって、日本人は人種意識が希薄だということではありません。むしろ近代以降、特にエリート層は「肌の色」に見られる人種的差異を強烈に意識してきました。

明治以降の日本は、近代化を進め、西洋社会との一体化をめざしました。制度や学問、科学技術を取り入れることはできても、肌の色のちがいは、変えようがない。

英国に留学した夏目漱石は、「土気色」の顔色をしているため白人にばかにされるのは当然だ、と感じました。そんな「自己醜悪視」や自己否定は、日露戦争後から顕在化（けんざいか）し始め、第２次大戦の敗戦と占領を経て、アメリカへの愛憎の念とともに確固たるものとなりました。

「日本人離れした」という表現は、ほめ言葉として使われます。この国の近代は、日本が日本であるために、日本を否定しなければならなかったという矛盾とともにありました。でも日本を切り捨てることはできなかった。そのジレンマを可視化するのが、肌の色だったのだと思います。

そうした意識は、いまも通奏低音として残っています。百貨店や美容室の広告には、白人モデルを使う例が多くあります。「グローバル人材」という名のもとに英語が万能であるかのように見なす風潮にも、白人至上主義が内在化しているのかもしれません。グローバル人材って、どんな人なのでしょうか？

ただ、外国人と接する機会が多い今の大学生を見ていると、かつての「白人幻想」のようなものは崩壊しています。白人男性がみなジョージ・クルーニーみたいなわけではないと知っているし、日本人の美的レベルは総じてかなり高い。以前の「自己醜悪視」は変わってきています。

ならば、なぜ「美白」に敏感なのでしょう。そこには、現代社会における女性の立ち位置が低すぎるという問題があるのではないでしょうか。化粧、服装、態度。社会には女性に求める「決まりごと」が存在し、根強い圧力になっている。美白の化粧品だって安くはありません。適切な言葉かどうかはともかく、自らの「価値」を保つためには、やらざる

を得ないという現状があるのだと思います。

「美白」があぶり出すのは、人種意識の問題だけではありません。女性や外国人、マイノリティーに対する差別を捉え直すきっかけを与えてくれるのではないでしょうか。

（2020 年 8 月 26 日　朝日新聞　「耕論」　聞き手・岸善樹）

通奏低音＝2 声部以上の音楽において、途切れることなく奏される低音声部（広辞苑）。
ジョージ・クルーニー＝George Timothy Clooney, アメリカ合衆国の俳優、映画監督

令　和　３　年　度
宮崎国際大学　国際教養学部
一般推薦Ⅲ期

試　験　問　題
【小　論　文】

受　験　番　号
氏　名

小論文　国際教養学部
問題
現在日本で俳優として活躍しているイラン人のサヘル・ローズさん（2019 年ｲﾀﾘｱ･ﾐﾗﾉ国際映画祭で最優秀主演女優賞）は、イラクとの戦争で孤児になった人でした。俳優の傍ら、虐待された子どもや、海外の貧しい子への支援を続けています。次の文章を読んで、サヘルさんのそうした活動へ駆（か）り立てるものは何かをまとめ、それに対するあなたの考えを 600 字以内で述べてください。

　出会いは偶然だった。「私たちをもらってくれませんか」。イラン政府は１９９０年代、テレビで孤児たちの養子縁組を募集していた。80 年に始まったイラクとの戦争は８年後に停戦合意。しかし戦禍の傷痕は深く、多くの幼子が親を失った。たまたまテレビを見た大学生フローラ・ジャスミンの目は孤児院の少女にくぎ付に。「小柄でかわいい。会ってみよう」。後の女優サヘル・ローズだった。
　大学で心理学を専攻していたフローラは、医師や看護師らと戦場で救出活動ボランティアの経験があった。フローラと面会した７歳のサヘルは無邪気に「お母さん」と呼ぶ。「見つめられ、その『視線』から自分が生まれたような感覚」とサヘルは振り返る。面会を重ねた後、フローラはサヘルに語りかけた。
「私の子どもになる？」
フローラの両親は当初反対した。イランで養子縁組するには子どもを産めない手術が必要になる。「そこまでして、どうして私を」。サヘルの疑問が氷解したのは大人になってからだった。フローラは幼い時に育児放棄され、祖母に育てられた。サヘルは言う。「一番大切な時に親の愛情を受けていない。自分の境遇と重ね、私に孤独を味わわせたくなかったのでしょう」
　サヘルを養子にしたフローラは家庭教師のアルバイトで生計を立てていた。だが生活は苦しく、頼みの綱は日本で働く夫。93 年８月、２人は混迷深まる国から日本へ旅立った。
　新天地の生活もいばらの道に。３人は埼玉県のアパートで暮らしたが、次第に関係がぎくしゃくしてしまう。来日から３週間後の夜、フローラとサヘルは家出した。頼れる人はいない。向かった先は公園だった。滑り台下のコンクリート製土管が「寝室」。サヘルは朝、公園の水道で顔を洗ってから小学校へ。フローラは来日後から働き始めた化粧品瓶製造工場に出掛けた。夕方に公園で待ち合わせし、近くのスーパーに行く。賞味期限間近のパンの耳を買って空腹をしのいだ。学校側も異変に気づく。毎日、同じ洋服。どんどん汚れる。ある日、サヘルは校門で「給食のおばちゃん」に「大丈夫？」と声を掛けられた。フローラと一緒におばちゃんの家に一時身を寄せる。２週間のホームレス生活は終わった。
　その後、フローラは離婚。仕事を変え、２人はアパートを転々とした。唯一の楽しみはスーパーのフードコートで、しょうゆラーメンを食べること。注文は１杯だけ。フローラは一口だけ食べると「後は食べて。お母さんのおなかは小さいから」とサヘルに勧めた。彼女の習い事や学費を賄うため、食費を切り詰めていた。
　サヘルは凜（りん）としたフローラの行動に、いつも驚かされた。おにぎりを路上生活者に手渡したこともある。「私は今、我慢すれば明日は食べることができる。この人は明日も、あさっても我慢しなければならない」

サヘルは中学生の時、上履きを校舎の窓から捨てられるなどのいじめにあう。悲観という袋小路に入り、自殺を考えた。フローラに打ち明けると「いいよ」と意外な返事。「でもお母さんも一緒に連れて行って。サヘルがいないと生きる意味がないから」。言葉の一つ一つがサヘルの心の琴線（きんせん）に触れた。

サヘルは戦争で人生が翻弄された。一方で「フローラも私を養子にしなかったら、幸せな生活を送ったかもしれない」と呵責（かしゃく）の念にも襲われる。そうしたサヘルの心のひだを見透かしたようにフローラはやさしく諭（さと）す。「あなたは生き延びたんだよ。世界で苦しむ子の希望の光になってほしいの」。迷い、悩み、不安に押しつぶされるようになる時、サヘルは「試練という名の遠足」と前を向くようになった。

高校在学中、ラジオのリポーターをきっかけに芸能界入り。女優の傍ら、虐待された子どもや、海外の貧しい子への支援を続ける。自分の体験を通して「闇の向こうには新しい景色が広がっている。自分で地図を描けることを子どもたちに伝えたい」と訴える。フローラからのバトンを引き継ぐかのように。

フローラと一緒に暮らすサヘルは約４年前、自宅近くの空き地を借りた。フローラや近所の人と小さなバラ園（約 50 平方㍍）を造るためだ。毎年５月、バラの甘い香りが鼻腔（びこう）をくすぐる。フローラが付けた「サヘル・ローズ」という名前。サヘルはサハラ砂漠乾燥地帯、ローズはバラの花を指す。バラは砂漠で育ちにくい。「困難でも力強く生きて」という願いが込められている。

血はつながっていなくても、数奇な運命の糸で結ばれた２人。「これからは私が支える番」。サヘルは病気がちなフローラを気遣った。

＊メモ

2019 年、サヘルはイラクを訪れた。フローラから「イラクを絶対に憎んでは駄目よ。あなたと同じような孤児がいるのだから」と言われていたからだ。イラン攻撃の最前線にいたイラクの元兵士と会った。サヘルがイランの孤児だったと伝えると、元兵士は「戦いたくて戦ったわけではない。本当に許してほしい」と涙ぐんだ。明日という日を迎えるために、武器を持ち、知らない人たちに銃を向けた元兵士の苦悩。「初めて戦争の怖さを知った」とサヘル。加害者と被害者。両者の心の傷を溶かそうと、サヘルは橋渡しの役割を担おうとしている。

（宮崎日日新聞　２０２１年１月１６日）